水牛通信　毎月1回10日発行　1981年6月10日発行　通巻36号　1980年5月23日第三種郵便物認可

水牛通信

VOL.4 NO.6
毎月1回・10日発行
定価200円

稲は音もなく育つ　人はたがやす　水牛はたがやす

モンコン・ウトックのはなし　荘司和子　2
水牛楽団のページ　15
ゆなおーれが　国吉　保　16
木の実はもとの木に戻る——与那国島のことわざ　20
われわれは話したい！われわれは聴きたい！
——ボローニャ一九七七年三月のスローガン　24

モンコン・ウトックのはなし

荘司和子

モンコン・ウトックははにかみ屋で寡黙の人だ。昼間はいるのかいないのか分らないほどひっそりしている。とてもお酒が強い。夜になってお酒が入ると、昼間とうってかわっていろいろなことを語る。カラワンについて語るとき、彼の瞳がひかり、ひめた情熱がほとばしり出る。

次は、彼がわが家に滞在した二週間ほどの間に、毎晩こんなふうにして語ったはなしをまとめたものである。

——僕はイサーン(東北)のローイエト県プノムプライ郡の出身です。生まれたのは一九五一年。父は小学校の教師で、母は農業をしていた。七人兄弟の真中で、姉二人、兄一人、弟二人と妹が一人います。田んぼを次々に売って七人全員学校に行かせてもらった。だから今は小さな畑が残っているだけ。今度家へ帰ったら家だけ大きくなっていた。姉のつれあいがサウジアラビアに出稼ぎに行っていて、そのお金で建てなおしたワケ。

僕が子供のころの田舎は、豊かだというイメージがあったな。食べることがかんたんだった。僕の家の近くには小さい川がたくさんあって、川でも田んぼでも魚がいくらでもとれた。今は人の方が多くなってしまって、川も沼もうめたてて田んぼになっている。農薬を使うから田んぼの魚もいなくなったし、だから小さいころの遊びというと、魚釣りが一番だった。それから昆虫をとったり、蛙をつかまえたり。田舎の子供はカメムシをとって、つぶして汁を出してから食べちゃう。雨期になると父や母が少し離れたところにある大きい河に行って、小屋をたてて泊りがけでたくさん魚をとるんです。たくさんとってプララー〔川魚を塩と米でつけこんで熟酢のようにする保存食〕を作るのです。僕たち兄弟は学校の休みの日に食料を持って手伝いに行く。

僕があがった小学校は、郡役場のある町の小学校で、父が教えていたのは少し離れたところにある村の小学校。好きな学科？　図画だな。魚とりに行って川べりの泥の上に、小枝で絵を描く。大きな絵が描けて楽しかった。泥といっても粘土質だから、こねていろいろな形を作るのも好きだった。

音楽に興味をもちはじめたのは中学に入ってからです。中学からはコーラートにいる姉のところに寄宿してました。ギターを売っていて、とても手が出なかったのですが、すごくほしかった。ピンを弾きはじめたのは専門学校へ入ってからですね。民謡ですか？　ウーン、子供のころは好きじゃなかったな。ただ、伯父がケーン吹きでとてもうまかったのです。モーラムが来るときは雇われて吹いていた。僕の家でもよく吹いてくれた。僕も少しやってみたことはありますが、吹けるところまでいかなかったですね。

ウィラサクさんの回想録には、モーラム、ラム・ウォン、スン、ラムプルーン、ラムラオなどいろいろな民謡の形式が出てきますが、どう違うのですか。

——スンは、王様や神々の出てくる古い物語をうたった叙事詩にあわせて美しい舞があります。うたうのは一人で、十人から三十人くらいの踊り手が来ます。毎年五月には火をたいてスンを舞う行事があります。雨乞いの儀式から発生したのかもしれない。このごろは現代的な内容でスン形式の詩を競うなんていうのもありますよ。モーラムとはメロディーが違う。モーラムも地方を巡業して回る楽隊が来てお寺の境内などでやります。モーラムの場合は、イサーンの民話、王様の物語などを中心にした叙事詩をうたうものや、即興で二人がかけあいでうたいついでいくのもある。踊りもそれによって、たくさんで踊るのや、男女ペアで踊るもの、一人で踊るものなどいろいろです。モーラム楽団は以前はたくさんあったのですが、今は減っているようです。ラムプルーンはモーラムのひとつですし、ラムラオはラオスのモーラム。テンポがゆっくりしている。楽団といっても出演料をもらえることは少なくて、お寺に泊まって村人に食事を出してもらうだけのことも多い。ラム・ウォンは一番かんたんなもので、村人だれでもが太鼓をたたいて、うたったり踊ったりするものです。

学生時代のこと。

——中学を出るとすぐ東北技術専門学校に入った。一九六八年ごろかな。五年制の学校なのですが、僕は途中でカラワンに入っちゃってちっとも学校に行かなかったから七年もかかった。「やっかい者」だったんでしょ、僕は。学校の方でとにかく「卒業しろ」というので、試験を受けにもどって一応卒業した。専攻は美術。

バングラデシュ・グループというのは、目的があって設立した組織ではありません。好きで集まって来てできたグループです。そのころ、バングラデシュでは食糧不足が深刻で、飢えた子供たちの写真などがさかんに報道されていたでしょう。僕たちもいつも腹をすかせていて、それとあまり変わりのない生活をしていたので、こう呼んでいるうちに他人からもこう呼ばれるようになったワケ。教室で寝て、魚を釣って来て食べて、ギターを借りて来て校庭や野原で、雲を見ながら思いつくままに即興で歌を作ってワイワイ楽しくやっていたんですね。夜は絵を描いたり。皆、美術学科の学生だったから。だんだん同好会みたいになって学校の行事の時うたったり、友達の喫茶店でうたったりした。カラワンを結成する二、三年前からこんなことをしていたんですよ。

そのころはもう学生の反政府活動とか、学内問題への抗議行動とかがあったのですか。

——僕が覚えていて参加したものでは、長髪

を禁止した学則に対しておこした抗議行動です。集会を開いたり、デモをやったり、丸坊主になって抗議した学生もいた。結果はどうなったのか覚えていないけど。

美術学科長が左遷された時は、美術学科の学生はほとんど全員が参加して抗議した。ポスター描くのはお手のものだからジャンジャン描いてバンバンはり出した。学内で集会を開いて授業ボイコットもしたんですが、学校当局は話し合いに応じない。それで県庁までデモ行進をやった。知事や県庁の上の方の役人は内務省から派遣されて来ているから、管轄が違うから学内問題に介入する権限はないと、とりあってくれない。でもこの後、学科長は復帰したので、学生側の最初の勝利になったわけです。

この二日後にはバンコクのラームカムヘン大学でもっと大きな抗議行動が始まりました。学部長のドクター・サクというのは、大物政治家と結託して金銭的にも汚いことをやっていた。その学部長が九人の学生を除籍処分にしたのです。ウィサー・カンタップも処分された一人で、このとき処分撤回運動が猛烈な勢いでもりあがった。ティラユット・ブンミーの率いるNSCT(タイ全国学生センター)が支援にたちあがったので、地方の大学にも波及したんですね。それからだったかな、バンコクやチェンマイの大学の進歩派の学生の新聞が送られてくるようになって交流が始まるのは。

モンコンさんたちも新聞を作ったのですか。

――ええ、作りました。「ウィタヤライ」という名で。それから僕ら美術学科の学生が中心になって、ラーチャシマ高校とか師範学校とか、大学がなかったので、専門学校や高校の学生、生徒たちを組織して、コーラートにも学生センターを作ってNSCTに参加した。

十・一四前後はどんなだったのですか。

――ラームカムヘン大学の九人の学生の処分が撤回された後、バンコクでは憲法制定要求運動が始まっていたのです。十月九日だったかな、憲法制定要求の主旨を書いたパンフを配っていた十三人が逮捕されたでしょう。これが始まりだった。コーラートでも翌日から不当逮捕反対の抗議行動を開始した。スラナリー広場に学生も市民も含めて何万人も集まった。バンコクだけじゃなくて、あっちこっちの地方都市でもみんなすごかったんだ。長い軍事独裁政権に対する不満が爆発して。食糧問屋や飯屋なんかは食べる物をどんどん出してくれるし、どっとカンパが集まって、それで僕たちはバスを十二台もチャーターして、十月十三日の深夜、バンコクへ向けて出発したんですよ。夜明けごろ、つまり十月十四日、サラブリ市の近くまで来たところで、バンコクは軍隊が出動していて入れない、という情報が入った。それで僕たちはそのままそこで待つことになって、二、三人の先遣隊をバンコクへ送ったんです。彼らがバンコクに着いた時は、政府が逮捕者を釈放して憲法を一年以内に制定するという声明を出したところで、NSCTもデモ隊を解散させるという決定をしたところだったんですよね。だからVサインで僕たちのところへ戻って来た。僕たちはそれを聞いて、勝った、勝ったというんでコーラートへ引き返してしまった。もうちょっとネ、時間がずれていたらバンコクまで行っていたのに。コーラートに帰ってテレビを見たら、軍隊がデモ隊に発砲してすごいことになってる。僕はその前、三日三晩不眠不休だったから、そのままダウン。ついにバンコクには行かれなかった……

右足をなくしたのは学生時代？

――そうです。二年生の時オートバイに乗っていて、猛烈なスピードで走って来た車にぶつけられた。そのうえ酔払い運転だったから、治療費や義足の費用は払ってくれたけど、デモをしているころはだからもう義足だった。だいたいオートバイに乗ってデモをしたんです。練習してゆっくりなら走れるようになった。右足に力が入らないから、ゆっくり走るだけ。

スラチャイさんや、ウィラサクさんとは学生運動を通して知り合ったのですか。

――スラチャイもウィラサクもこのころは、詩や小説を書いていてコーラートによく来たんですね。二人とも運動とかかわりはあったけれども、直接、運動を通して知りあったわけではなくて、同じようなことに興味をもっていた、ということで、よくいっしょに酒を飲んだ。そのうちギターを持ってきて僕らといっしょに歌をうたった。ヤソートン県にもいっしょに行ったんですよ。「人と水牛」とか「コメのうた」、それから「グラー」ができて、僕はナーイピーの詩「イサーン」に曲をつけていっしょにうたったわけです。そのあとバンコクへ帰ったスラチャイから電報がきて、タマサートでいっしょにうたおうということになった。ここからカラワン楽団ができるワケ。はじめのうちは四人だけ、ポンテープはそのころコーラートで陶器作りをしていました。スラチャイが一番年長で二十五歳くらいだった。あとはみんな一歳ずつ若くなる。

カラワンの周りにはカラワンを応援してくれた仲間たちが多いですね。

――スラチャイが作家だったので親しい作家や詩人が多かったですね。スチャート・サワッシー以外は皆同世代の若い連中で、ウィナイ・ウッガリクが一番親しかった。それからウィサー・カンタップやソムキット・シンソンなどです。

南タイ巡業中に一度解放区でもうたったことがあるそうですね。

――ハートヤイに行っていたとき連絡を受けて行くことになったんですよ。その後日本人で芝生端和という人が入ったところです。迎えが来て、山中で一泊して着いたのが昼ごろでした。その日の夕方からうたいはじめて次の日の明け方までやっていた。八月七日の武装闘争開始記念日だったのですね。

それまでは解放区なんて、かんたんに入れない遠いところ、という気がしていたワケですが、行ってみたらなんと近いところなんですよね。山の上なので僕の足のことを心配されたんですが、その前にイサーンのグラドウン山に登ったことがあるので、それより低い山だというのでぜひとも行きたくってね、登ったワケです。この直前ひどい吐血をして、医者から一ヵ月はうたうなと言われていた矢先のことだったんですよ。

解放区ではみんなが並んで拍手して迎えてくれて感激しました。僕たちの歌もうけましたよ。二日くらいしかいなかったから他のことは何も分りませんでしたね。

吐血したというのは何が原因だったのですか。

――スラチャイが結婚式で来ていなかったので一人でうたい続けたことと、酒の飲み過ぎじゃないかな。朝起きたらひどく血を吐いて、タンカで病院まで運ばれた。このあとラオスにいた時に一回、中国でも一回血を吐いて、喉をつぶしてしまったから、こんなひどい声になった。（笑）

村で公演する時は出演料をとらないかわりに、村人がお酒を出したりごちそうしてくれるわけですか。

――そうなんです。この時も一晩中うたったり飲んだりしていたんですよ。

農村を回る時は、村に着くとまず学校へ行って子供たちに、今晩その村で公演することを宣伝する。それで子供たちに何か食べる物を持ってきてくれるように言っておくと、夜になると村人総出で食べ物やお酒をもって集まってくる。農村には何の娯楽もないワケで、町から楽隊が来てただで音楽を聴かせてくれるというだけでもお祭り騒ぎなんですよ。それがちょっとうたって帰ってしまうのでなくて、彼らが聴きたいだけ一晩中でもやってくれる。それに政治への関心が全国的に高まっていたころだったから、彼らの質問に答えたりいろいろ語り合いながらやるので、僕たちの歌だけというより、そういうのを全部ひっくるめてだと思うけど、すごい人気だった。

「人と水牛」とか「雨をまつイネ」「コメのうた」「イサーン」など、農民をうたった歌も多かったし。ただカラワンの歌は農民にとってはむずかしい歌詞が多いので、どういう立場で何についてうたっているのか、それもよく説明したんです。

大学でやる時も同じようなやり方で、いろいろ話しながら演奏するのですか。

――そうです。それにあちこちから手紙が来て質問してくるので、そういう質問にも答えながらやるのです。たとえば「カラワンはどうして皆長髪にしているのか」とか、「帝国主義についてうたっているが、帝国主義が何か分っているのか」とか、「讃美する（体制を）歌をどうしてうたわないのか」などなど。学生の中でやる時は、お互いに気ごころが知れているという安心感みたいなものがあった。でも僕は村でやる方が楽しかったですね。

カラワンの音楽は、フォークにタイの地方の音楽をとり入れていって独自のスタイルができたように思いますが。

――そういえるでしょうね。スラチャイが一人で「人と水牛」をうたい始めたころはフォークそのものだったのですが、それにピンが加わり、トングラーンのタイコで民謡のリズムをつけることでただのフォークではなくなってきたわけでしょう。それほど意識的にカラワンの音楽を作ろうとしたわけではないのですが。

カラワンの音楽っていうのは、自由に演奏するっていうことですね。楽譜があってそのとおりにやるのでもないし、誰かが演奏の仕方を決めておいてそのとおりにするわけでもない。それぞれが、その時その時で自由なひき方をするから、毎回同じ演奏になるわけじゃない。音楽を勉強した人なんて誰もいないから、そもそも楽譜が読めないんですよ。タイの小、中学校の音楽は、歌をうたっているだけで楽譜は教えてくれない。だから新しく作った歌は、テープにとっておかないと忘れちゃうこともありますよ。

歌を作る時ですか？　スラチャイはもともと詩人だから、自分で詩を書いてギターを弾きながら曲をつけていくので、別に問題はなかったでしょう。

僕の場合ですか。僕の場合はスラチャイみたいに自然に詩が生まれてくるわけじゃないから大変でした。作らざるをえない状況ができて、それで作り始めたんです。

どういうことかというと、カラワンが分裂したことが二回あって、一回目はスラチャイと僕、ウィラサクとトングラーンとに分かれた。二回目はスラチャイ一人が離れたんです。女

性問題とかありまして。スラチャイがいないので僕たちが歌を作ることになった。「立って闘え（ルック・クン・スー）」はこの時僕が作った歌です。トングラーンは「危険なアメリカ人（アメリカン・アンタラーイ）」を作った。ポンテープがカラワンのメンバーになったのもこの時です。

この四人でイサーンをまわってうたっているうちに、スラチャイが映画「トンパン」を撮り終えてまたカラワンにもどって来た。メンバーが五人そろったし、カラワンの曲も二十六曲ほどになっていて、十分演奏会がやれたので、あちこちの映画館を借りて演奏して回っていたのです。

ところでモンコンさんの首に賞金が五万バーツかかった、というのは何のとき？

――トングラーンと僕の郷里へ帰ったら、はり紙がしてあった。カラワンはコミュニストで扇動しにやって来る、ということですね。雇われた殺し屋とばったり会ったら、なんと幼な友達でね。その夜はいっしょに飲んで話して、結局殺されなかった。

このころは警察が動いて、あちこちでポスターを焼かれたり、公演予定の映画館が脅しをかけられて、とりやめにされたりしました。銃撃されたこともあったし、暗殺が横行していて、僕たちのようなことをしているのは生命がけだったんですよ。でも怖いという気持は全然おこらなかった。

御両親は心配なさったでしょう。

――とても心配していました。でも僕のすることに口をはさんだり、やめさせようとするようなことはありませんでしたね。

弟たちは僕と同じようになった。一人は僕と同じ学校で、もう一人はバンセンの教員養成大学に行っていましたが。義兄も教師ですが、十・六の後逮捕されました。

解放区で体験したこと

十・六クーデターの夜、コンケンの街を出て「森」へ行くわけですね。決意したのはいつだったのですか。

――南タイの解放区に行った後、プラパートの帰国、タノムの帰国と続き、左右の衝突は尖鋭化していました。学生の反対運動も暴君帰国反対で完璧に一致団結していて、まるで軍隊みたいだった。決死の覚悟でリーダーの統率のもとに、一糸乱れず結束しているというような状況だったのです。僕たちも何かあった場合どうするかについては話し合っていた。僻地に行って身をひそめるか、ラオスに行ければそれでもいい、というようなことでした。僕個人でいえば、「森」へ入ることもありうると思っていましたね。

十月初め、僕たちがバンコクを後にした時は、帰ってこられなくなるかもしれないと思って荷物をまとめて出ました。十月六日はコンケン大学にいたわけですが、バンコクのタマサート大学の集会で学生が多数殺されたというニュースがはいって、抗議集会をしていたのです。僕たちにとってもこれが最後の演奏になった。夕方、統治改革団がクーデター成功宣言を全国に放送した後、ただちに学生たちとビラやテープを焼却して、楽器を預け、出発したのです。

楽器は、検問にあった場合身許がばれる可能性があったので置いていきました。いっしょに出発したのはカラワン五人の他に、コームチャーイ楽団とバングラデシュ・グループ時代の友人一人、それにコンケン大学の先生一人。

途中で止まっていた間に、この先生と案内してくれた人とが誰かと連絡したようだった。ルーイの町に夜明け前に着いて食事した後だった。「森」へ入るかどうか今すぐ決断するように言われたんですよ。カラワンは全員即決で賛成。コームチャーイは二人ほど何か都合がつかなくて戻って行きましたが。

モンコンさんは足が悪くて走れないのに、前線のゲリラ地区に入ることは心配しなかったんですか。

――それまでもその時も、あまり足のことで心配したことはないのですね。僕はやりたいと思ったらやってしまうたちで、あまり考えない。生命が保障されないような状況はそれまでもあったので、むしろ「森」の方が安全だと思ったくらい。

最初に入った山はルーイの町が眼下に見下せるくらい近いところで、附近の農民がよく上って来てタップ（宿営地）が見つかってしまうので、移動が多かった。移る時は、最近のタップだと分らないように枯葉をいっぱいかける。

そこからプーサーン山系へ移動する時がいちばん大変でしたね。川を渡って、普通の村のある所を通って行くので、いつ通報されるか分らないから急ぐ。飲まず食わずで歩き通しでしょ、僕は義足に蔓がからまってなかなか進めない、雨が降ってきてぬれたら、ついに義足が重くなって動けない、それで気を失ったんです。

幹部という言葉がよく出てきますが、これは各地区に派遣されて来ている党員のことですか。

――そうです。党の政策を遂行するその地区の責任者です。各地区の構成員は四つに分けられる。まず党員（サマーチック・パク）、民青支部（ヌアイ・ヨー）、民衆本体（モアンチョン・プーンターン）これは農民がほとんどで、あと労働者が少し、それに組織外民衆（モアンチョン・ノークジャットタン）として都市から来た学生や知識人が位置づけられていました。

プーサーン地区には統一戦線の組織はありましたか。

――なかったですね。僕たちがプーサーンにいたころは、まだ統一戦線ができていなかったでしょう。

それでは都市から入った学生、知識人はみな組織外民衆だった？

――いいえ、そうじゃない。一部は都市にいるころから党員やシンパだったので、「政治・軍事学校」を終了するとすぐ党員になった。何パーセント？　そんなことはぜんぜん分らないな。党員になったということを公表しないんだから、憶測しているだけで。なんでも秘密、秘密です。僕は民青に入ったから、その地区の民青の中で誰が党員かだけは分りましたが。だいたい分隊規模でしかお互いのことは分らない。

民青（タイ民主青年同盟〔ソー・ヨー・トー〕）に入ったのはどういう経緯からなのですか。

――三十歳以下の党員と、党が党員候補者として工作した者で組織されているわけですが、僕の場合は「学校」が終ってそれぞれの隊に散った後、民主青年同盟について講議を受けたのです。講議が終ると用紙が配られてサインすればいいようになっているワケ。実のところわけが分らなくて困ってしまって、ウィラサクに相談したのですが、彼が病気になってしまって入院しちゃったので、結局サイン

したんですよ。これでコミュニストになっちゃうのかって考えたんですが、どのみちコミュニストだって言われてきたのだし……ね。僕の他にトングラーンも別のところで入った。個人的にさそうとか、場所によって工作の仕方はいろいろあったようです。

モンコンさんは森に入る前、バンコクに恋人がいたんでしょう。

――ウーン。カラワンのファンでそのころまだ十六歳の女の子のことでしょ。カラワンが森に入った後、彼女は南タイの解放区に入って、僕たちのいた東北へ移動を願い出たんです。それが許可になって移動する途中、バンコクの家へ立ち寄ったら母親に軟禁されてしまった。これが有名になってしまって、あとあとまで尾をひきましたよ。恋人がいるとレッテルをはられて。この後、他の女性が、何故か僕を恋人だと、幹部に報告した。それで僕は幹部に呼び出されて、他に恋人がいるのにと注意されました。党が私信や小包をみな検閲するので、個人的な問題にも介入されるのです。党利にかなった(!?)見合い結婚というのだってほんとうにあるんですよ。

スラチャイがセクサン・プラスートグンの妻ジラナンと親しかった時も、周囲が騒がしかった。僕は「心配するような話じゃないだろ。スラチャイは世界中の女性を愛しちゃうような男なんだから。彼の芸術は愛から湧いてくるのさ」と言ってやった。

「せみ」「たけのこ」「ロンパーブン」という歌を作ったときのはなし

――せみがものすごくたくさんいて、森中ワンワン響くほど鳴いているんです。「プロットエーク、プロットエーク（解放、解放）」って鳴いているみたいに聞こえる。竹は森の中では生活必需品なんですよ。たけのこを食べるところからはじまって、食器にしたり、小屋を建てたり、あらゆることに使う。解放戦争に役立っているでしょ。それでラム・ウォン調の楽しい歌にした。党からは、たけのこやせみが革命と関係があるはずがない、と批判されましたがね。

「ロンパーブン」というのは、政府軍に焼きうちにされた村の名前です。その村に行ってみたことはないのですが、その村から逃げて来た村人の話を聞いて、以前学生のころ、やはり全村焼きはらわれたナーサイにＮＳＣＴの書記長ティラユットと調査に行ったことがあったので、その時の情景が重なりあってできたのです。特定の地名が出てくるということで、党は放送（タイ人民の声）は許可しませんでした。

この村の話は、実は党が解放村にしようとして大がかりな工作をしていたんです。国旗は掲揚しないし、ポスターははるし、派手にやったので政府軍の掃討の対象になった。政府軍が大きな勢力を投入してきたのにひきかえ、解放軍の勢力はわずかでこの村を護りきれない。それで農民を全部、家財、家畜ともども森に避難させたのです。政府軍はその後村を焼きはらったので、残っている人は少なかったですが。この人たちは解放軍ではないから農耕して食べなければならないでしょ。

「森」の中ではするところもないし、食糧だって不足しているワケで、それでまた村へ送って帰ったのですが、家が焼かれてしまって寝るところもないのです。はなばなしい宣伝と工作をしておいて、そこの住民を護ることが全然できなかったのですよ。

タバコや大麻はどうやって入手するんですか

――タバコは調達部が下の村で購入してきた

ものを各自買います。タバコといっても紙巻きじゃなくてきざみタバコだから、二パーツですごくいっぱいある。

解放区の通貨？　普通のパーツですよ。月に一人十五パーツずつ支給されて、それで石けん、歯ブラシ、チリ紙とかの日用品を買うのです。

大麻は農民が自家用に作っているものを分けてくれる時に吸うだけ。党は公けに認めているわけじゃないですが、取締るわけでもない。農民にとっては、食欲増進、腹痛の時の痛み止め、精神安定、疲労回復などの働きをする欠かせない植物ですからね。

そういえばラオスにいた時、前線に戻ったスラチャイから大麻を送って来たんですよ。大きな包みでね。幹部は中身をチェックして、僕に受けとるべきではない、と言った。僕は仕方ないと思ってあきらめたら、ウィラサクは「とんでもない」って断固として受けとりに行った。それでは、というので僕ももらいに行った。

酒は僕たちなんか買う金がなかった。森に入った時に金を持っていた連中がいて、彼らが買ったときにいっしょに飲んだだけですよ。

野菜や米などの食糧はほとんど農民から買っていましたね。北部や南部の解放区では、生産隊というのがあって、米、とうもろこし、きゅうり、かぼちゃなんかを作っていますが、プーサーンは小さなゲリラ地区ですから生産隊はなかった。民衆工作隊が多少畑を作っていたくらいです。プーサーン山系は低い山ばかりで、山の上に大きな畑なんか作ったら空からすぐ見つかってしまう。僕らが病院のそばで小さい畑をしていたのだって収穫しないうちに爆撃されてしまった。だいたいは谷あいの低地の農民の畑にまじって畑を作る。そうすればどれが誰の畑か区別がつかない。

その他解放勢力と協定を結んで森で木を伐るかわりに、米や灯油、とうもろこしなどを提供してくれる支持派の農民というのもある。米はいつも不足していて、とうもろこしを混ぜて食べることが多かったですね。

ラオスにいたときは、米は中国から送られて来るので野菜だけを自分たちで供給してました。中国から武器、弾薬、かんづめ、タバコなどといっしょに大型トラックで大量に輸送されてくる。無償供与で。だから米は余るほどで、それで豚を飼ったくらい。

ラオスの後方基地＝拠点Ａ30には、統一戦線つまり民主愛国勢力調整委員会（ＣＣＰＤＦ）の本部があったのですか。

――そうです。その他医療隊と病院、党の小学四年までの子供を預っている学校、理論研究隊、芸術隊などの拠点が集まっていたのです。炊事班と護衛にあたっていた兵士以外はほとんどインテリばかり集まっていた。拠点間の交流は許されていなかったので、演奏のある時しか行かなかった。スラチャイとウィラサクはよくこっそり出かけていましたけどね。

シップソンパンナーはどんなところでしたか？

――雲南省の南の方にあるタイ族の自治区で、そうね、ひとつの郡くらいの大きさでしょう。その中のひとつの町にいました。ＣＰＴの拠点はない。どういう政治形態になっているのかは分らないですね。音楽を習っただけですから。中国共産党がＣＰＴに便宜をはかってくれているということなので、この地方の行政とは一切かかわりがなかった。われわれがタイから来ていることもごく内密でした。

外人用ゲストハウスに泊っていたんですが、外人観光客が多かった。ある時フランスのテ

レビ局の人たちが僕たちの練習しているところを撮影し始めたんですね。中国人の関係者は大あわてで、こんなものは映してもつまらない、とか言って制止したんですが、彼らはすっかり興味をもってしまって、これがおもしろいって言うワケ。結局予定通り午前は観光に行って、午後から撮影を許可した。その間に僕たちは練習を終えて、午後は放免。代わってシップソンパンナーの芸術隊が練習しているところを撮影させたんですよ。これでわれわれはテレビに映し出されないですんだのですが、あの人たちは僕たちが誰だか分っていたら特ダネになっていたんじゃない。

最近高橋悠治さんの家で、ジット・プサミクの「サヤーム、タイ、ラオス、クメール語の由来、およびその民族の社会形態」という本を読んだのですが、あれはジットの書いた本の中で一番おもしろいな。僕がいたことのあるシップソンパンナーから、ビルマ国境のマンスーあたりのことが、ずっと出てくる。タイ語やタイ族の歴史的研究ね。ジットは国立図書館の資料を調べて書いたのですが、僕はまた行ってこの続きを調べてみたい気がしている。

ジット・プミサクをCPTはどう評価していましたか。

——あまり聞いた覚えがない。彼の作った歌は「人民の声」放送でいつも流していましたが。「革命の地プーパン」「血の決済」「人民解放軍のマーチ」なんかですね。ジットの書いた譜と違った弾き方をしていた。

プーパンでジットと会ったことのある古い同志の話だと、彼は「森」の中で民衆の一人として生活していくことにすぐ慣れたということですね。だいたい、ほめた話しか聞いたことがないな。

ジットが「森」へ入ったのは、シップソンパンナーあたりへ行きたい、という気持もあったのじゃないかな。

詩ですか？　あれはむずかしいですね。農民なんかに分りっこない。

CPTとベトナムが断交した後、ラオスの拠点A30は全員引きあげることになったところで回想録は終っていますが、その後カラワンの人たちはどうなったのですか。

——ポンテープ、トングラーンは北部のナン県あたり。多分スラチャイと会ったはずです。ウィラサクはチェンライ県。僕一人だけ中国へ行かされた。国境を越えてムアンラーに着いたところで、国境〔中国とラオスの〕が閉鎖されたことを知った。でもあとで分ったのですが、僕は「人民の声」放送で働くことに、すでに決まっていたんですよ。

「人民の声」放送は、はじめはベトナムにあったそうです。アメリカの北爆がはげしくなったころ中国南部に移ったという話を聞きました。同じ周波数を使って引き続き放送したので、放送を聞いている側には全然分らなかったらしい。

僕のいたところは昆明の郊外だった。僕たちは放送のプログラムにそってマスターテープに吹きこみ、予備にもう一本とっておくだけでその後は関知しない。放送局はどこか別のところにあるのですが、誰も知らされていない。僕のいたところも警戒がすごく厳重でしたね。高い塀でかこまれていて、外出もめったに許されなかった。

ここでの仕事は数ヵ月しか続かなかった。一九七九年の七月ごろだったか、放送が中止になったでしょ。最後に「放送を一時中止する」という声明が流されましたが、理由の説明は全然なかった。僕たち内にいた者は、「一時」でなくて、ずっと放送できないことが分

っていましたがね。最後のころは一日中音楽ばかり流してました。たまにCPTの「自立」宣言とか、カンボジア問題について、「手を結んで火を消そう」なんていうのもあった。「国共合作」の真似、ですか？　それほど公式なものではなくて、たんに個人的意見の表明にすぎませんでした。

それからは党の子供たちのための学校で、絵や音楽を教えていたんです。初めは昆明のそばで、休みの日には昆明の町や近くの湖に遊びに行きました。最後はビルマ国境近くのマンスーというところ。小学校五年以上の子供たちで六十人くらいいました。

党の子供たちはみんな親と離れて暮らすのです。六歳以下の幼児はムアンラーに保育所があります。十六歳をすぎると活動家や兵士になって出て行く。以前は中国語は教えていませんでした。僕が帰ってくる直前、中国語も教えることが決まってカリキュラム作りが始まった。近々タイへ帰れるという展望が遠のいたからじゃないですか。

「森」へ入る前と、入った後とではCPTに対する考え方が変わりましたか。

——はじめのうちは何も分らなかったから、とくに変わっていないですね。ベトナム、ラオス、カンボジアが解放されたばかりでしたから、タイの革命もそう遠くない将来成功するだろうと思っていました。

共産党については何も知らなかった。ただタイの旧社会は、これは一度ひっくりかえして作りかえなければという感じはあった。それでCPTと解放軍が実際にたたかっている唯一の勢力だったでしょう。僕はプーサーンにいたときは誠心誠意任務に忠実でした。はじめは歌を直されてもなんとか良くしようと努力してました。政治学習も、ウィラサクは前からたくさん本を読んで知っていたからうんざりしたでしょう。僕は何も知らなかったから、真面目に聞いたし、真面目に実行しようと思った。

ただ疑問はだんだん蓄積していったのですね。「苦難を物語る」というの、あれはいやでした。「政治・軍事学校」の期間中に一回ずつある。僕は焼き打ちにあったナーサイ村の話を何回もやらされました。すごく陰うつになる。

ラオスの基地に行ってから大規模な芸術隊に組織された時は、かなり疑問に思い始めました。芸術家をひとまとめにして軍隊組織にして何ができますか。それでもまだ、なんとかよくしていこうという気はありました。

最後に中国に送られてからですね。情勢はどんどん変化しているのに、つんぼさじきで何も知らされない。CPTへの批判が高まって戦線を離脱してバンコクへ帰る者が続出しているという噂は流れてくるのですが、党の側からはレッテルはり式の一方的非難があるだけ。僕はこの点に関する疑問と、友人に会わせてほしいという要望を党に提出したのですが解答はなかった。

タイへ帰ろうと思い始めたのもこのころからです。「森」を出て行った人たち、たとえばセクサン・プラストーグンのような人に対しても「人民を裏切った」としか言えないことにがまんできなくなりましたね。CPTは政党のひとつであって、CPTを離れたことが人民を裏切ることになるわけじゃないでしょう。CPTひとつが人民を独占していいわけがない。

帰国を申し入れてから実現するまでに約一年かかりました。

歩いてもタイへ帰らせてほしいと申し込んだ。結局歩くのは許可されなくて、バンコクへの空路が開かれてから帰国したのです。

ＣＰＴを離れるにあたって、党についての僕の考えを書かされた。僕は、人民は解放を必要としている、人民の解放闘争にはそれを指導する党が必要であり、ＣＰＴは今までその闘争を導いて来た理論と実践と信用がある、そしてそのための軍隊を保有している、というようなことを書いた。ただＣＰＴは人民の闘争を指導する政党のひとつにすぎないということを強調したかった。そして僕自身は、このように目も耳もふさがれた状況の中では生きていけないことも。

「人民の声」放送が閉鎖されていなかったら、まだ帰国できなかったかもしれませんよ。

五年ぶりにタイへ帰ってみて、ずいぶん変っていましたか。

――あまり変ったという印象は受けませんでしたね。といってもまだあまり何も見てないのですよ。大学に行った感じでは、学生の雰囲気ががらりと変ってましたね。紹介された今の学生はカラワンを知らなかった。

でもカラワンのテープはまだ売っているんですね。僕らのまるで関知しないところで、次々コピーされて。僕は昔のカラワンのテープすら持っていなくて今度買ったんですよ。

家には帰国を知らせておいたのですが、夜突然帰ったので母をずい分驚かせてしまった。近所の人なんてもっと驚いて、幽霊でも見たような顔をしてた。以前カラワンは全員死亡というニュースが新聞に載ったことがありましたから。父は亡くなっていました。亡くなる前、もう口がきけなくなってからも「人民の声」放送をかけるように、一所懸命ラジオを指さしたそうです。母には、「鎖でつないでおけるものなら、つないでおきたい」と言われていますよ。

日本へ来て水牛楽団といっしょに公演してどうでしたか。

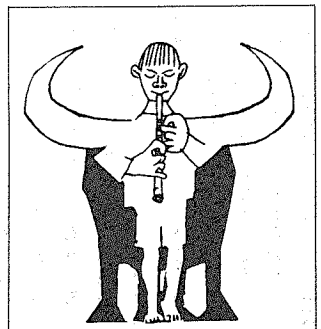
――はじめは大変緊張しました。僕は長いことうたっていなかったし、水牛楽団のテンポやリズムとカラワンのとが違っていたし、言葉は通じないし。それに中野や日比谷は大きな会場で舞台に立ってうたうだけだから、余計あがってしまう。僕たちはいつも聴く人たちと話しながらやってたでしょ。

水牛楽団とカラワンの歌をうたっていて、是非もう一度カラワンを結成したいと思うようになりました。今年の一月、日本へ来る前に一度失敗したのです。レコード会社から話があってできかかったのですが、彼らはカラワンの知名度だけを利用して、歌は彼らの売りたい歌謡曲だけということだったのです。僕たちはまだ身売りする気にはなっていない。ウィラサクと手紙で話したのですが、今回の水牛との共演をカラワンの再出発の第一歩として考えよう、と。これからの三年以内に僕たちの新しい音楽が生み出せなければあきらめます。それまではがんばってみます。今のところウィラサクと僕の二人だけしかいませんが。

日本では、僕の歌はおせじにもうまいわけじゃないのに、どこでも暖かい拍手をしてくれた。外国人だから歓迎してくれたのか、内容が分ってくれてのことか分らないけど。

あなたの歌を聴いて感激したとか、よかったと言う人がたくさんいますよ。あなたの存在そのものがにじみ出ているようでモンコンさんの歌を聴いて「生きるための歌」という意味がはじめて分りました。カラワンにとって歌は「生きるため」にあったんですね。

――すごくうれしいな。僕も「生きるための歌」という意味がはじめて分りましたよ。



水牛楽団のページ

五月もいそがしい月だった。

五月三日（月）　「大地の唄・心のさけび」愛知県勤労会館。ピアノ連弾（福山伊都子と高橋悠治）のオギンスキ「ポロネーズ・祖国との別れ」にはじまり、タイの歌、戸島美喜夫の「フィリピンの抵抗詩より」と「絵とき唄ときバナナ食民地」に終る。ながいプログラムだとおもって、さっさとすすめたら、はやくおわってしまった。それでも二時間。前日のフォークは三時間半もやったのに、といわれた。

五月五日（水）　三里塚労農合宿所五周年。合宿所の庭のベンチでタイの歌と三里塚の歌をうたう。外だとちいさな声もよくきこえるのはなぜか。空の下には午後の沈黙がある。太陽も風も人間の声もその一部になる。小泉英政さんが三里塚をみせてくれる。夕方までつづいた討論会のあと、また演奏。甄鰻亭によってどぶろくを飲み、小泉さんの家でフィリピンのスライドをみせてもらう。

五月十日（月）　新宿安田生命ホール「核はいらない！反戦平和をめざす新宿のつどいコンサート」。「いぬふぐり」と「祖母の唄」、タイの歌、ピアノ数曲。この日はモンコン・ウトックの誕生日。三十一歳になった。楽団員と数人の友人で祝う。

五月十二日（水）　水牛音楽教室の第一回。参加者十三人。「アジアのいなかの音楽」について、高橋悠治がはなす。カリンガ族のガンサ・トパヤを例に、人びとがともに生きることをあらわす音楽のかたちをかんがえる。

五月十三日（木）　水牛音楽教室、朝のクラス。参加者十六人。内容はおなじ。

五月十七日（月）　「光州5月」、中野文化センター。参加者はたぶん四百人位。韓民統の協賛による。日韓連帯運動の関係者はほとんど見かけなかった。それぞれの主催する集会でいそがしいのだろう。運動そのものもおちこんでいる。状況が変化しても、あたらしい問題意識をもった人たちがくわわることがない。いつもおなじ顔のくりかえしでは運動は力をなくしてゆく。

これで水牛楽団の自主コンサートの企画は全部おわった。評議会を近日中にひらき、秋からの方針をきめなければならない。

五月十九日（水）　モンコン・ウトックはタイにかえった。スーラチャイも森からでた。カラワン楽団は全員バンコクにあつまって、かれの帰国をまっている。コンサートの予定もできていて、カラワンも五年ぶりに活動を再開するらしい。

モンコン・ウトックと三箇月つきあって、水牛楽団はいままでのやりかたや音楽家としての経験の重荷からすこし自由になった。今年か来年、カラワンとであって、いっしょにコンサートをしたいとおもう。たぶんタイで。

おなじ十九日と二十日は、水牛音楽教室の二回目で福山敦夫がタイの「生きるための歌」のはなしをし、「白いハト」をいっしょにうたった。参加者は三人にふえた。

五月二十九日（土）　「光州5月」、神戸学生・青年センター、午後2時半。

五月三十日（日）　おなじ、大阪バナナホール、午後2時半。

六月十九日（土）　早稲田大学内テント。

ゆなおーれが——多良間の「世直れ」の祭り

国吉　保

五月九日、宮古から飛行機で多良間に着いた。宮古と石垣の中間に位置する、人口二千人くらいの小さな島である。九日のみずのえたつの日を中心に三日間ほど、「スツウプナカ」と呼ばれるまつりがあり、ちょっと学校のほうは自主休講にして、母親の生まれ島でまつり見物をする。じつは、東京の学校で音楽を教えてもらっているS先生の案内役のつもりで一応同行してきたのであるが、何しろこの島は初めてなので案内は島の人にたのみいっしょに見学させてもらおう。

七日の「梅雨入り宣言」から晴天がつづく。今日も三十度近い気温である。

いつもなら今頃は葉を全部おとして真赤な花を咲かせているはずのデイゴの木が、今年はどうしたのか青々としたままだ。「復帰」十周年とかでヘソを曲げてしまったのか。

多良間は平たい島で、山も川もない。畑のサトウキビと屋敷垣の福木の緑で、島がおおわれている感じをうける。赤瓦の屋根も健在である。

夜になると、男たちは地酒で昼間の疲れをいやす。都会的な騒音がないだけに島の夜はしーんとして静かだ。月のない夜は深い闇につつまれる。都市では失なわれた真の闇が、この島ではまだ存在している。十一時頃になると寝しずまってしまうが、寝床では潮騒がきこえる。

島の月は美しい。一点の濁りもなく冴える。こういう月の晩になると若者達は外に出る。巷に寄り集まって冗談をとばし、村はずれに出て歌をうたう。村落に近い北方の浜も若者たちの「夜あそび」の場所である。（「村誌たらま島」）

さすがにこの孤島まではマックロネシア（流行おくれかな）志望のヤマトンチュ達もおしかけてはこないだだろう。海に観光施設らしきものはない。島の産業のほとんどが農業なのだそうである。

北の浜に出ると、すぐ前に水納島が見える。

その昔、ウイグシクカンドゥヌという人物がいた。彼は島の農業の指導者であり、広い粟畑があった。

ところが刈り入れ前の彼の畑が何者かに荒らされてしまうことが数年も続いて起こった。そのためカンドゥヌは泊まりこみで畑の番をしたところ、刈り入れ時期の夜そこに現われたのは人間ではなく、幾頭かの四つ足の動物だった。

彼がその動物を追いかけると、それらは北の海へ出てサンゴ礁の上を走り、白波のくだけるところで止まった。

そのうちの一頭がカンドゥヌに向かって自分たちが竜宮の神の使いであることを告げ、作物を見守り、育てている竜宮の神への感謝を彼が忘れていることを戒めた。そして毎年収穫後に初の物をそなえるように言うと海の中へ消えていった。カンドゥヌはこれをシケヌタマダラなる人物に話し、祭の準備をはじめた。

またある年、五月に粟を収穫することができなかったため、祭り延期の祈願をカディカリのウヤという人にたのんだところ、彼は人形をたくさん作って竜宮の神に祈願をした。そのとき、突然たつまきが起き、カディカリのウヤは人形もろとも消滅してしまった。それで以後はこの人物の霊にも感謝をするようになった。

まつりの起源についてそんな言い伝えがあるそうだ。「スツウプナカ」の「スツ」は「節」、「ウプナカ」はお祝いとか祭りのことを意味する。

夜、祈願のうたの練習をききにいく。「ニーリ」といわれる古謡を何人かでうたうのだが、ことばが古くかなり長いうたであるため練習がいるらしい。「ウイグシクカンドゥヌのニーリ」はうたい終わるまでに四十五分かかった。

このあと井戸を何ヵ所かまわり、供え物をして「スツウプナカ」の開始を告げる。うたをうたいながらみんなが神酒をのむ。そのときのハヤシ歌が「ゆなおーれが」である。

十日、道行きのうたをきくため、朝から司（ツカサ）のおばあさんの行列について祭場をまわる。

このまつりは一ヵ所で祭事が行なわれるのではなく、村のなかに独立した四つの祭場が設けられ、それぞれでうたをうたって祈願をする。これらの祭場を順番に司や「客」として招かれた村の人がまわると祭場にいる人たちはこれを迎え、もてなして次の祭場まで送る、という具合にすすめられるのである。

各祭場はいくつかの座をつくり組織的に運営されている。「ニーリ」をうたったり祈願をしたりする役目の中老座、行事運営の中心となるカンジン座、料理をつくるクバン座、神酒をつくり客にだす係のブシャ座、供物の魚をとる人たちのイム座など。

どこの祭場でも活気をおびるのは何といっても神酒を飲む場面である。「ゆなおーれが」をにぎやかにうたい神酒の入った皿を高く持ち上げる。客全員にまわるまで何度もうたう。

最初のうちは見物人を決めこんでいたけれども、座の人たちがさかんに誘うのでしまいには座に加えてもらう。おかげで神酒をたっぷり飲まされた。

まつりの準備は六十日も前からはじめるそ

うだ。干支はちょうど六十回でひとめぐりするから、準備もみずのえたつの日から行なわれるわけだ。

イム座のひとは祭り期間中は家へ帰らずに海に泊まり、魚をとるという。そういえば海にはテントが張ってあった。

客のもてなしを終え夜になると、きのうの晩に練習していた「ウイグシクカンドゥヌのニーリ」がうたわれる。歌詞の内容はといえば古代の農業をうたっているらしく、カンドゥヌが畑に出て粟の種を蒔き、せっせと手入れをし、実った粟を刈り入れ、神酒をつくり、飯をたくまでのようすを詳細に描くのである。

夜おそく宿にもどる。

どこでもそうだが村（島）をあげておこなうわりには相当のんびりとしたものだ。座の人たちはうたや祈願の合間にゆっくりとアワモリをのむ。客を迎えるときもアワモリだから、まあようするに一日じゅう飲んでいるみたいなものだ。

新聞をみると「復帰十年」の特集記事に、東京へ出てきている若者の話がのっている。

「人と待ち合わせをするとき沖縄では一時間待たせても平気だったけど、東京では五分おくれてもイヤな顔をされますね。」

よく聞く話だ。しかしだいたいは東京のほうが正常だと考えているんじゃないか。沖縄世とヤマト世とはまず時間がちがうだろう。

十一日、朝はやくから「カディカリのニーリ」や「あがりけーぬニーリ」がうたわれる。まつりは今日でおしまいだ。「カディカリのニーリ」はカディカリのウヤのことをうたった長いうた。もうひとつのほうは「スツウプナカ」の終りを告げる内容になっていた。このニーリをうたいながら魔よけの動作をする。頭にカズラを巻きつけたおじいさんたちが、竹で地面を叩きながら祭場のなかを列をつくってゆっくりと歩く。先頭の人はモリを持っている。歌がおわると同時に列をくずしみんなであたりをはしゃぎまわる。

これで終わったと思っていたら、アワモリがでてきた。拝む方向を変えて、また別のニーリをうたうようだ。昼まえの飛行機で那覇にもどるのでこのへんで祭場をひきあげる。

四年ほど前、ヤマトの資本が多良間に石油備蓄基地（CTS）をつくろうとたくらんだことがあった。こんな小さな島に五〇〇万キロリットルの巨大なCTSを建設する計画だった。石油タンクで島をうめつくし、島の人びとをおいだそうというたくらみでもある。

このCTS問題が浮かびあがると、沖縄本島や東京にすむ島出身の人たちが反対運動を組織し、文字通り島ぐるみでこれをはねかえした。沖縄世があるようにここにも守るべき多良間世がある。

「ゆなおーれが」

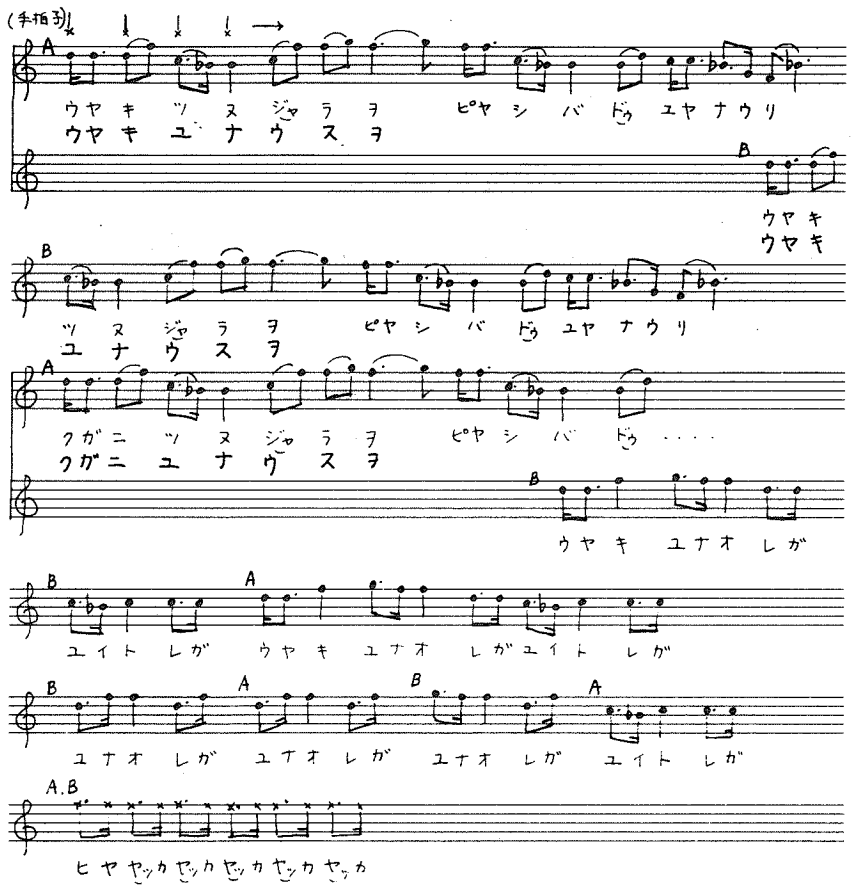
キビ畑のなかを歩いていると四方の祭場からきこえてくる。「世直れが」つまり世が直るように、豊年の世になるようにとのハヤシである。

神酒をつぐ二人（楽譜ではA）からうたいだす。BはA以外の全員。

富める角皿で／はやしたてると豊年の世になる／黄金の角皿で／はやしたてると豊年の世になる

富めるユナウス皿で／はやしたてると豊年の世になる／黄金のユナウス皿で／はやしたてると豊年の世になる

ゆなおーれが



木の実はもとの木に戻る——与那国島のことわざ

水牛楽団のコンサート「光州五月」の会場に、国吉さんが大きなバッグをもってあらわれた。そして、いま、沖縄から帰ってきたところです、お土産です、みんなでのんでください、と、与那国のお酒「どなん」をくれた。はじめは「どなん」だといわず、だまって細長い紙包みをとりだして、

「これ、なんだと思いますか？」

と、うれしそうにニヤニヤしていたのだが、

「どなん、だろ」

すぐにあてられてしまって、なんだかガッカリしたようすだった。国吉さんがお母さんの生まれた島、多良間の祭りをたずねた文章が、この号にのることになっている。

コンサートのあと、中野駅ちかくの大衆酒場で打ちあげパーティをやり、みんなですこしずつ「どなん」をのんだ。じつに口あたりのいい酒なのだが、なにしろ60度である、ひとくちふくんだだけで、胸のあたりがカッと熱くなる。あさってはタイに帰るというモンコン・ウトックさんにも、のんでもらった。かれはかなりの酒のみである。自信ありげにコップに口をつけた。

「ム……」

びっくりして、コップを遠ざけ、ゆっくりとひとくちすすって、それっきりになってしまった。どうも、あまり……ということらしい。残念ですね。

つよい酒に酔っぱらって、だが翌日になるとその酔いはすっかり消えている。なんともいい気分ではないか、と思っているところに堺市の庄司護さんという方から、空色の表紙の『与那国語（よなぐにことば）ノート（4）』という小冊子が送られてきた。関西援農会の発行。一九七八年一月の小浜島にはじまり、琉球の島々で援農活動をつづけてきた庄司さんが、あらたに「きび刈り援農に来る人々のために」つくった、小型の「与那国語辞典」八二年度版である。

「琉球語との出会い」と題されたあとがきをよむと、そこにつぎのようなことばがしるされていた。

——私の沖縄でのくらしはこの小浜島から始まった。島に着くと、ただちに畑に案内され、いっしょに働らく人たちに紹介される間もなく、ナタで砂糖キビを切り倒していく作業が与えられた。最初の休息時間に、共同労働（ユイマール）する九軒の農家の人たちに紹介され茶菓子を楽しんだが、その時、島の人たちの話す「小浜語」が私にはひとことも聞きとれず、本当におどろいた。わずかに「ヤマトゥ」という言葉が、本土出身者である私について語っているのだと伺われた。このとき私は「琉球語」の存在をはっきりと教えられた。そして、沖縄が、すくなくとも文化の領域では「独立」しうる可能性を残していることを私は認めた。

この本には、与那国語とその他の八重山方言との比較、会話、与那国語→本土方言、本土方言→与那国語、与那国についての参考文献目録——などがびっしりつまっていて、ことばを中心にした与那国小百科のおもむきがある。そのなかの「ことわざ51例」を紹介しておく。これらのことわざを、庄司さんは大正十四年にでた本山桂川の『与那国島図誌』からひろったらしい。

（以上、津野記）

＊

ここにあげられている「ことわざ」は、大きく分けると二種類になる。

一つは、生活の知恵として語りつがれていくもの。

もう一つは、時代の支配的イデオロギーとして新しく生みだされたもの——である。ここでは、婚制に関するものが、その新しい「ことわざ」である。採集した時代とも関係している。

アギダンヤ　アミカゼ
蜻蛉多ければ雨か風か

フュヌ　アサヤキハアミカゼ
冬の朝焼は雨か風か

フュヌ　ドウヤキハティンキ
冬の夕焼は天気

ナツヌ　ドウヤキハホメラレン
夏の夕焼はほめられぬ（雨か風か）

ドンミダヌドウサカヤ
独り者には病気がつく（夜歩きするから）

ブトミヌ　ミヌガー　シキンヌウタガイ
夫を持たぬ女は世間から疑われる

ミヌアガミヤ　ダーキナイニ　ナライ
女の子は嫁に行かぬ先に教育せよ

ビンガアガミヤ　シキヌダシー　ナライ
男の子は世間に出して教育せよ

ツアーヌ　ムヌヤ　ウブミチヌ　ハタニンデナライ
知らぬことは往来の繁きところで習え

トウーヤヒライツチリ　ウヌヤヌイツチリ
人は交際して知れ、馬には乗って知れ

トーウヤマイ　ドーウヤマイ
人を敬えば己も敬われる

ワイブイトイブイヌヤ　トウビドウヤンヌンナ
仕事（作付・収穫）する時は飛ぶ鳥も見るな

カラタヌミンヤ　アルバシュドウタミル
田の水は有る時には貯めよ（有る時の倹約）

ハイムヌヤ　ハイヌグヒ　シカマヤ　キーヌ
グンナ
食物は食べ残し、仕事は残さずにやれ

ミヌワヌ　ダーマリヤ　シカイガツタノムト
女の出歩きは中傷の元

アサネスルミヌグワ　ヒンソナムト
朝寝は貧乏の元

ツイモンナタ　カイシナル
心からすれば酬がある

ドウヌバチャ　タチバテ
人の罰はてきめんに来る

カンヌバチャ　ドウリドウリ
神の罰はゆるゆる来る

ティヤティトウミリ　ミンヤキキトメリ
耳で聞いた事は口でだまって居れ

コンジョダカラミノワトウ　ハラダカルニ
ツトヤ　メイヌマイニトウレル
女の根性高いものと、柱の高い船は目の前に倒れる

ハヤワンジュトウ　ハヤウマトウ　キッタギ
ヤーニ
早く根性が出る人と、早い馬とは間違いがある

ミットンダムドウヤ　インヤヌン　ハヌン
夫婦喧嘩は犬猫も喰わぬ

ダキナィヌムンドヤ　ヒンソナムト
家族のけんかは貧乏の元

ハタラギャドウ　キャンツジル
働けば幸福になるのは当然

フュンニヤ　ヌシトヌムト
不精者は泥棒の元

オモカジカラヤ　ミノワヤノミンナ　トリカ
ジカラノセリ
おもかじから女を乗せるなら、とりかじから乗せよ

タビヌサトヤ　サトスルモヌアラヌ　チモノ
スミバナニ　シティ　ハルヤチンダ
旅の人とは結ぶな、すぐに故郷を思い出す

タビヌサトヤ　シマンキンドウ　モドルキノ
ナイヤ　モトンキド　アイツル
旅の人は島に戻る、木の実は元の木に戻る

ニダマイニヤ　アビクトババイ
寝る前にはきれいな言葉を用いよ

サナンカゲウル　ビンガヤ　ドマヤノマイモ
コナンナ
褌しめている男なら、婿養子になるな

ハヤオギャ　マフリヌカミヌ　ワルン
早起きすれば、福の神が廻ってくる

トンカマイッタガラヤー　ミノッタガラマイ
タ
妻をさがすなら目下から探せ

ターアケタカラヤ　カンバンニアギリ
田を買うなら上を見て買え（水利を考えて）

ターモーケタカンカヤ　カンバンニモーギシ

田を設けるなら上を見て設けよ（水利を考えて）

フユヌクイカラ　ナツヌワイブタ
冬の声から夏の声が出る（冬声をからして働らいておけば、夏はいい声で歌も出る）

キノソラヤ　イツィノソラヤ　ンチマレルン
ドウノソラヤ　ンチマンナ
木の高さや石の高さは極めよいが、人の高さは極められぬ

キヌマガイ　イツイノマガイノアレルン　ド
ウマガイヤ　ノアレルン
木の曲りや石の曲りは直せるが、人の曲りは直せない

ビンガヌククルヤ　ミンブリダル　ミヌガヌ
ククルヤ　ンビノサティニドアル
男の心は頭にある、女の心は尻にある

ソトガタバンニビカマイリ
舅方を見て嫁をもらえ

ミーティナマイヤキレ　ティーライナマイヤ
キンナ
目では見ても手では触るな

ミノドウゴト　ツィモノドウゴト　モットモ
ノアラヌ
目で見ても取るものではない、心からも欲しいと思うな

ドウモッティヤ　ウィカンディ　キノナイヤ
モトンキドアィツル
人の悪口を言えば自分に返る、木の実は下に落ちる

ナガヒラトウ　ミノガットウヤタンカ
中柱と嫁とは同じこと（家の支えになる）

ドウロハランニヤ　ヒッイナミノカッティ、
アベエルトウンマティ　ドチトカタッティ
夜通す船は暗礁がかたき、美人を妻にすれば友達のかたき

ココロヤヌノアヤ　ドウグヤ　ドヨノゴマガ
イ
心は蓆の綾の如く真直ぐに、慾は屏風の曲りのように様々に

トウノサタヤマイヨシ
人の沙汰（噂）すれば眼の前

ドウロノミヤ　カティノミ
夜人の沙汰すれば塀に見える

ダートナエトウンダムトウン　サグクィデ
イトウダムンナン
隣近所と仲悪くしても作隣とはよくせよ

ドリヤシードアルガ　ンピトヤ　シードマサ
ル
尾類はやめる時があるが、小さい泥棒は大きくなるばかり

ミノドウグニナルモヤ　ヌシトド　マーレル
目の慾のあるものは泥棒になる

庄司護さんの連絡先——
〒590　堺市三条通六—一二
明日香アパート二F四号

〝われわれは話したい！　われわれは聴きたい！〟

一九七〇年代にはいって、ボローニャはイタリア左翼による生活と文化の自立運動の中心地になった。さまざまな主張と方法をもったこれらの運動を、同地の「ラジオ・アリチェ」（アリス放送といったところか。アリスは「不思議の国のアリス」のアリスだろう）をはじめとする自由ラジオ局が、ゆっくりとしたしかたでつないでいた。

一九七七年三月、ネオ・ファシストの集会を見ていた五人の労働者が暴行をうけ、それをきっかけに、ボローニャの街頭で左翼の労働者・学生と右翼・警察とのあいだではげしい衝突がおこった。そのなかで「過激派」狩りが強化され、ついに「ラディオ・アリチェ」が閉鎖されて、八人の局員が逮捕されるにいたった。以下の記事はイギリスの『レッド・ノート』というパンフレットにのっていたものである。

ラディオ・アリチェが襲撃された

三月十二日の土曜日、ボローニャの路上で衝突がおこなわれているあいだ、同地の自由放送局「ラジオ・アリチェ」は、最新の情勢をつたえる同志たちの電話を放送しつづけていた。その夜十一時十五分、警官隊が急襲して局を閉鎖した。かれらはまっさきに局のあるビル中の電気を切った――が、同志たちはべつのビルから電線をひきこんで放送をつづけた。やがて警官隊が突入した――が、同志たちはマイクをかくし、送信機をそのままにしておいた。以下のエピソードはすべて生放送された。

この記事はそのとき録音したテープにもとずくものである。だがテープをとったのは同志たちだけではない。警察も自分たちのテープをとった。そのテープにもとずいて、ラジオ・アリチェの同志たちはさまざまな罪名で

告発されている。

（バックに雑音。ものすごい混乱。椅子がうごかされ、人びとが歩きまわっている。電話のベルが鳴る）

電話の声　もしもし――ラジオ・アリチェ？

同志A　線をあけておいてください。警官がいます。電話が必要なんです。

同志B　二階へいこう……ここをでよう。

同志C　みんな、おちつくんだ。

（ふたたび電話のベル）

電話の声　もしもし……アリチェ？

同志A　そうです。警察がきてる。法律防衛団のメンバーをみつけて、このことをすぐにつたえてください。

だめだ、窓からはムリだよ、オイ！（メチャメチャな雑音）いいですか、とても重要なことなんです。線をあけておいてください。メッセージがあります、すべての弁護士に、この放送をきいている同志たちに……。どうか弁護士たちに連絡してください。

（背後の声――「警官が射ってるぞ……やつら、俺たちを狙ってるんだ」）

いいですか。警察はドアのとこにいます。ドアを破ろうとしてます。やつらはピストルをふりまわしています。――こっちは、あけるのを拒んでいます。かれらがピストルをすてて捜査令状を見せないかぎり、ドアをあけるつもりはないといってやりました。それでもピストルを手ばなさないので、弁護士がつくまでドアはあけないといいました。

（電話のベル）

同志A　いいですか、すぐきてください。緊急事態です。早く……やつらはピストルや防弾チョッキや、ええい、くそったれ……プラテロ街十四、オーケー……きてください、待ってます。

同志B　おい……マウロ！　頭をさげろ！

（同志のひとりが警察にどなる――「弁護士だ。ちょっと待てよ、弁護士がこっちにむかってるんだ」）

（ドアの呼びリン、たえまなく鳴る）

同志B　ラジオ・チッタ……すぐラディオ・アリチェに電話してください。われわれの放送をきいてるか、これを他の局に中継してくれているか、こっちに知らせてください……ああ、ラジオでどうぞ……こっちもきいてます。ただ、われわれがきいてるのがわれわれの放送なのか、そっちで中継してくれたものなのかが、わからないので……ラジオ・チッタ、できたらそのことも知らせてください。よろしく。

同志B　やつらはドアを破るぞといっています。われわれは警察に包囲されてます。みなさん、ご覧になったかどうか知らないけれど、あの映画、ええと、チクショウ、なんというタイトルだったっけ……ドイツの……カテリーナ・ブルーム事件の……いまここにあれとそっくりのヘルメットがいます。あれとそっくりの防弾チョッキをきて、ベレッタをふりまわしてます。奇妙キテレツ、信じられない……まるで映画みたいだ。（背後から声）ぼくは絶対に映画を見てるんだ、もしやつらがいまここで現にこのドアをドシンドシンやってるんでなければ、そう思っちまう。

同志C　ちょっと背景音楽をいれようぜ。

（音楽、はいる）

同志A　わたしは……ええと、わたしは今晩ねむれるかどうかもわかんない。……くそイマイマしい状況です！

（混乱した物音――はげしく強打している）

同志B　たったいま、また警察がドアをドシンドシン叩きはじめました。「あけろ！　あけろ！」とどなってます。くるぞ……注意しろ……伏せろ！

（警官――「この野郎、ここをあけろ……あけるんだ！」）

同志C　弁護士たちがこっちにむかってる。五分だけ待て……もうそとの通りまできてるんだ。

（警官――「はいるぞ。いいな……！」）
（ひとりの同志が電話にこたえる――「もしもし、こちらラディオ・アリチェ……」）

警官　手をあげろ。あげろ！　まっすぐ……

同志A　いや、アルベルトというやつは知らない……ぼくはマテオだ……いいか、警察がドアのとこにいる……

（全体的な混乱）

同志C　やつらはなかだ！……ここにいる！

同志B　ここにいる……突入してきた！　われわれはみんな手をあげてる……たったいま、やつらははいってきた……われわれは手をあげさせられている。

同志C　やつらはわれわれのマイクをひきちぎろうと……

警官　そら、手をあげてろ！

同志B　われわれは手をあげた。やつらはいってる、ここは「破壊分子の巣」だ……

（送信は中断される）

こうして警察はラディオ・アリチェを閉鎖した。ボローニャの路上におけるゲリラ戦争を「指導した」という罪で。そのメンバーによって攻撃がくわだてられたという仮定で放送局を閉鎖する。これは合法的か。ラディオ・アリチェの事例は、イタリア全土の自由ラジオにとってのテスト・ケースになりそうだ。その結果はきわめて重大なものになるだろう。

ここに、イタリアにおける自由ラジオの発展の歴史と背景をあつかった文章の抜粋を掲載する。以下は「ウェッジ」第一号（一九七七年夏）にのったマーク・グリムショーとカール・カードナーの文章による。

イタリアには三つの国営放送局があって、それぞれにニュース・プログラムを流している。これらの放送局は、いまの連立政府で権力をわかちあっている諸政党によって分割支配されている。この一枚岩の現状にヒビをいれる必要があった。

では、どうすればこの現状にヒビをいれることができるか。その決定的なテスト・ケースのひとつとなったのが、一九七五年七月、ピエモンテで（非合法に）送信をはじめた「オンデ・ローゼ」（赤い電波）の場合である。そのテーマ曲は有名なチリの解放歌「エル・プエブロ・ウニド」（人民は団結する）だった。

はじめの一週間で、よく知られたコミュニスト、ラディカル、アナーキストたちとのインタヴューをきくことができた。「インターナショナル」や「バンディエラ・ロッサ」などがちりばめられていた。また毎朝、武装ゲリラ集団「赤い旅団」に積極的な示唆をあたえたという疑いをかけられた、ジョヴァン・バティスタ・フォッサノの早期釈放をねがうあいさつをきくこともできたのである。

送信機は、ひろい意味でのPDUP・マニフェスト派に属する三十人ほどのグループの手で、あるアパートの三階に設置された。送信はちょうど一週間、押収命令をもったカービン銃の一隊が、ちょっと困ったようにドアをノックしたときまでつづいた。かれらは丁重な態度で「バンディエラ・ロッサ」がおわるのを待ち、それから装置類をもって立ち去った。

おどろくべきことに、その後の「オンデ・ローゼ」その他にたいする法廷の意見は、一九五七年のおわりまでに、このような国家による押収を憲法違反とみなすにいたった。かくして、国家が放送独占をつよめようとしていると思われたまさしくその時期に、国家の立法議会がその独占を非合法とする決定をくだすのである。

自由ラジオはそだち、ひろがる

この電波の「解放」によって、自由ラジオ局は爆発的に――一年間で全国八〇〇局にまでとめどなくひろがった。自由テレビ局も約一〇〇をかぞえるにいたった。

小さな局のおおくは三〇〇〇から四〇〇〇ポンドの費用でつくられた。くわえてラジオ局の運営費は、新聞にくらべるときわめてやすい。局はヴォランティア労働によって運営されるから、人件費も最低限である。そして新聞とちがって、きくのはただなのだ！

それでもやはり資金問題はのこった。そのおもな原因は三つある。第一が一般的な聴取契約の問題で、各局は放送でそれを訴えた。第二は商業広告の問題（おおくの局はいかなる広告をも拒否したのだが、にもかかわらず）。そして第三は政治グループ、党派、その他の組織による後援という問題（これまた、ほとんどの局はこの種の資金援助からの独立をたもとうとしたのだが、にもかかわらず）。

現在では「自由」局の五〇～六〇パーセントは、二十四時間のロック・ミュージックのサーヴィスとひきかえに、商業的なスポンサーを獲得している。のこりの三〇パーセントかそこらは、ラジオ・ハムか少数グループによる低予算・場あたり的な仕事のごった煮である。自由ラジオ本来の社会主義的な部分は、結局、のこりの二〇パーセント程度にすぎない。

こうした展開にたいする共産党の態度に、ひとこと触れておこう。共産党は自由ラジオにかんして正式にはなにもしなかった。かれらは例の「歴史的妥協」によって政府にすすんでくわわったことで、国有放送のネットワークにちかづいたと信じこんでいるように見える。

どのようにして局を運営するか

ひとつ例をあげよう。「ラジオ・チッタ・フトゥラ」（未来都市）は、議会外の革命党派AOとPDUP（労働者前衛党と統一プロレタリア党）が準備した資金によって、ローマで開局した。しかしながら、局がいちいちこまかく政治的にコントロールされることはない。それは全体としての革命的左翼と労働者運動の、さまざまな考え方を自由に表現す

るための広場として組織された。
「ラジオ・チッタ・フトゥラ」の典型的な一日の放送は、おおよそこのようなものである。

六・三〇　労働者のためのモーニング・コール。ニュース。解放歌
七・三〇　その日の新聞の政治・経済面、労働組合や文化関係のできごとの分析。
八・三〇　家庭生活について。食物の価格や家計など。
九・三〇　音楽――前衛からロックまで。
十・〇〇　「ラジオ・ドンナ」からの電波。自立的な女性解放運動。
十一・〇〇　学生ニュース
十一・十五　音楽。
十二・〇〇　特別ニュース番組「今日のできごと」――経済や政治についてのインタヴュー、討論。
一・〇〇　音楽。
二・〇〇　ローマからの地域ニュース。
三・〇〇　労働組合、兵士、女性、間借人グループなどの現場から。
五・〇〇　女性運動の時間。
六・〇〇　特別ニュース番組――ある特定のできごとについての討論。
七・〇〇　今日のニュース。
八・〇〇　音楽。
十・〇〇　その日の中心の討論――電話で参加できる。
十二・〇〇　音楽。
一・〇〇　「同志たちのナイト・スポット」――スタッフたちが交代で、彼女／彼がなにをのぞんでいるかを放送する。
三・〇〇　その日のニュースの見出しを要約して。
三・三〇～六・〇〇　深夜労働者のための番組（タクシー運転手、警官、病院労働者など）。まえもって録音された労働者とのインタヴューが放送される。電話で自由にくわわることができる。

国はいま、これらの放送局とそれに代表される危険にたいして行動をおこしはじめつつある。それには二つの基本的なやり方がある。経済的な措置、そして公然たる物理的抑圧である。それぞれの放送局から一日三十ポンドの金――おそらくはレコードの使用料に相当する――をとるという計画がすすめられている。これは音楽を放送していない局にもいちように適用される。この動きは、金を払うことのできる（ゆたかな広告収入をもつ）商業局と、金が払えない左翼の局とのあいだにクサビを打ちこむためのものなのだ。

これらの動きにたいする抵抗もつよまっている。しかし、もし経済的措置が失敗したとしても、国は「ラディオ・アリチェ」の場合のように、物理的な抑圧をかけることができる。ボローニャにおける三月暴動とデモンストレーションのあいだ、ラジオ局はまったくあたらしいやり方でつかわれた。デモのあいだ警察の動きをモニターし、それをデモ参加者たちにつたえていくことで、直接的な攻撃のための武器になったのである。警察はただちに手入れをして、局を閉鎖した。

過去の十八ヵ月間で、イタリアにおける自由ラジオははてしなくひろがった。いまの問題は、そのひろがりが強固なものになりうるかどうかということである。このことはとくに、イタリアの左翼がいまこの瞬間に直面しているいっそう困難な組織問題、政治問題を解決する力をもっているかどうか――その点

にかかわってくるだろう。しかし、ともかくも突破はなされたのだ。左翼にあたらしい手段が――そしてまた、あたらしい課題があたえられた。左翼のプロパガンダとアジテーションは、いつもおなじことのくりかえしなのではない。左翼はエレクトロニクス時代に徹底的に突入したのである。

さて、日本の場合は
――あるTV番組

記者　CB無線あるいは市民ラジオとよばれる無線機が、この五、六年、とくに大型トラックのドライバーのあいだで急速に普及してきました。ちゃんとした国家試験をうけなくてはならないアマチュア無線とはちがいまして、CB無線のほうは申請すればだれにでも免許がとれるという簡便さに加えて、やすいものなら二、三万円で買えるということもありまして、CB無線はいまや、おおくのドライバーの必需品ともなりつつあります。

ところが、だれにでもつかえるという簡便さが逆に利用されまして、免許のない者が電波法を無視して違法にCBをつかうというケースもひじょうにふえてきました。いまやCBのほとんどは違法とさえいわれるほどに、混乱した状態となっています。

CB無線については電波法に規定がありまして、出力は〇・五ワット以下、周波数も二七メガヘルツを中心に八つのチャンネルだけときめられています。しかし、こうした合法的なCB無線機では、そんなに遠くと交信することはできません。そこでいまドライバーたちのあいだでつかわれているものは、輸出用などといって売られているもので、出力も五ワットから十ワットと大きく、チャンネルのかずも二十チャンネルから四十チャンネルというものがほとんどです。CBといえば、いまやこうした違法な無線機をさすというほどに、一般的になっています。

ドライバーの声　ハーイ、××ハイウェイのあたり、いまのところ、異常ありませーん。事故車もいなければ、まアー、工事の規制もなにもありませーん。いまのところ、スイスイですヨー。

記者　送信中のところですね。これは神奈川県のあるCBクラブのドライバーが、車三台で交信しているところなんですけれど、三人以上で話しあうのを、かれらのことばでネットワークとよんでいます。

キャスター　なるほど。どういうことを話しあっているんですか？

記者　いまおききのように、他愛のない世間話がほとんどで、つかっている人たちにきいてみますと、道路の混みぐあいとか、ときには警察の取りしまり状況といった情報交換につかったり、眠気ざましにいいという人もおおいですね。

キャスター　なるほど。居眠り運転のへるのは結構なんですけれどもね。こういうCBをつかっている人たちというのは、どのくらいいるんだろう？

記者　アノー、すくなくとも八十万人――百万人ぐらいいるというのが、一般的な推定ですね。

記者　CBがないと仕事やりにくいですか？

ドライバーA　イヤー、もう、ないとハンド

ルが半分きれたような感じですね。潜水艦でいうと、潜望鏡みたいな感じじゃないですかね、このCB無線が。

ドライバーB　横のつながりがたくさんでてくるしね、友だちもふえましたし……それにこう、もちつもたれつでね、無線仲間がパンクしてるとサー、やっぱりとんでって助けてやるし、自分がパンクすると、みんなあつまってきてくれますからね。

ドライバーC　なんでもムチャクチャつかってるんじゃないもん。ルールにしたがってやってるもんでネ、いまのところそんなネ、迷惑あたえるようなとこはスタンバイしちゃうし、自分のばあいはウシロメタイということはないですネ。まア、違法にはちがいないということはわかってます。

記者　利用者にしてみれば、違法CBはだれもがやっているスピード違反のようなものだという考え方がつよいんですけれど、CBの一部が実害をともなっているという点は見のがすわけにはいきません。もっともおおいのは、テレビ、ラジオへの受信障害ですが、これはとくにトラックのおおい街道筋に集中しています。

おじいさん　ひどいときはもうチラチラして、見えないときあんネー。家のテレビなんか、そういっちゃなんだが、まだ買ったばっかでネ、去年の暮に買ったんだけど、それでもうなんだもの。もう泣き寝入りだよ。

おばあさん　ザッザッザーとネ、おッそろしい音がするの。画面がチラチラとしてネ、一瞬みえなくなっちゃうの。それでネ、大きな声がするですよ、どなってるような……。

おじさん　結局、とりしまってもらうよりしようがないんじゃないの。

記者　それから漁業無線とCBは、周波数が二七メガヘルツ帯というところで隣同士なものですから、よけい影響をうけるわけで、遭難とか緊急事態があったときに困るという心配がひじょうにつよいんです。

漁業会社　とくにひどくなったのが五十年からですネ。ここんとこ二、三年はとくに、どこの波へまわしてもCBの不法電波がでると。そして私たちの行動範囲も伊豆七島から千葉県沖、伊豆半島、静岡沖のほうまでいくですけんど、どこへいっても、そのCBの不法電波がでるというのが現状なんです。漁船にとって無線は生命線なんですから、それだけに、そういう人たちに私たちと混信するような波はつかってもらいたくないというのが、私たちのお願いですよ。

記者　生命にかかわる大事な交通信号機、あれにもちょっとしたわるさをしたことがあるようです。(略)このほか、ステレオ、カラオケ、電子オルガン、有線放送、電話、コンピューター、自動車の電子装置と、さまざまな分野で障害となっていることがわかってきました。

またこうした障害をおこしている犯人は、CBのなかでもとくに出力の大きい「ハイパワー」と称されるものであることもわかってきました。そのなかには出力一キロワットという放送局なみの強力なものもあります。関係者のあいだでは、違法CBといってもすべてに問題があるわけではなく、ハイパワーのCBはきびしくとりしまるにしても、一方では出力を多少あげて、五ワット程度のものまで合法化すれば、いまほどの混乱はふせげるのではないかという考え方が有力です。

警官　免許証もってますか？　フン。ふだんはこれ、発信してるの？

ドライバー　ふだんっていうか……ただ、ふ

つうの……

警官　それでね、いま電波管理局の方でお宅がいま無線を発信している状況を録音にとりましたから、それをあとでお宅にきかせます。お宅が免許もってないということは、これ、違反ですから、ネ。違反ですから無線機とりはずしますから、ネ。

キャスター　こういう取りしまり、しょっちゅうやってるんですか？

記者　月に一度か二度というところですね。いまの法律では違法のCBでも、機械をもってるだけじゃ違法にならないんで、取りしまりがむずかしいわけです。違法の電波を発信したという確実な証拠がないと検挙できない。ところがこんど法律が改正されまして、五八年の一月からは違法の機械をもっているだけでも取りしまりの対象になると、そうきまったんです。

ドライバーD　指導なら指導らしくやれよ、はじめから喧嘩ごしだもん、だいたいよ！

警官　いいから、いいから……

ドライバーE　ちいせえもんをいじめるよりもよ、大きいところからいじめてくんねえとダメなんだよ。

ドライバーD　ほんとにおメエよ、三日でいいからいっしょになってね、この連中と生活してみなよ。このダンプの運転手のなかで、五千円以上の金もって歩いてるやつ、ひとりもいねえよ。

警官　だからね、呼ばれるまえにつけてなきゃいいんだよ。いろいろ障害がでてるから取りしまりやるんだから。

ドライバーD　そりゃそうかもしんねえ。でもネ、これしか支えがねえの。これしかたのしみがねえの。

警官　だけどよ、お互い法治国家であるかぎりよ、まもってもらわねえと困る。ダンプばっかりやってるわけじゃねえけど、ダンプしかいねえわけだ、このあたりにはよ。

記者　CB無線をつかうドライバーたちは、たいていどこかのクラブに属しています。こうしたクラブの活動はひじょうに活発で、CBのいまの普及はクラブ組織なしには考えられないといわれるほどです。クラブのなかには、CB無線をアメリカなみに認めろと運動したり、協議会をつくったりしているところがありますが、このクラブの会合でも、きびしくなる取りしまりにどう対処するかが最大の話題でした。

あるクラブ　関東だけでもクラブのかずが五百前後あるんじゃないかといわれますね。そのうちの七〇パーセントぐらいがトラックの運転手さん。というのは結局、未組織の労働者っていいますかね、大会社じゃない、零細・中小の会社に働いている人たちが、自分ひとりの力じゃひじょうに弱い、みんなまとまることによって助けあおうじゃないか——それがいまのCB無線のクラブなわけですね。

だから、いま電波法がものすごくきびしくなろうとしているわけですけれど、きびしくなることによってそういうクラブが崩壊しちゃうと、かれらはひじょうに弱い立場においこまれちゃう。このCB無線の組織っていうのは、やめろやめろというだけじゃなくて、逆に、いい意味で行政をふくめ利用していったほうが、日本のトラック輸送にとってはプラスじゃないか——そう思うんですけどね。

記者　CB無線を監督する立場にある郵政省も、違法CBのかずがおおすぎるため、取りしまりの強化だけでは混乱はまぬがれえないと認めています。電波管理局のタテノ陸上部

長にきいてみました。

電波管理局　電波法の改正――とくに五八年のイチガツ・イッピから強力に取りしまるということもありますので、多少、このあたらしい制度のもとに、こういった国民のみなさまの要望というものを吸収できないかどうかということを、ま、検討しておることも事実でございます……。

編集後記

過日、いよいよ帰国することになったモンコン・ウトックさんといっしょに、水牛楽団の二人の女性――八巻美恵さんと福山伊都子さんがタイに発った。男たちはとりのこされた。ワッハッハ。バンコクでは、ちかく再発足するらしいカラワンの全員が待ちかまえている。

彼女たちははたしてカラワンの演奏をきくことができたろうか。モンコンさんの故郷イサーンで、彼女たちはどんな経験をしたのだろう。まだ、なんの便りもない。次号にのせる予定の彼女たちの対談を、この間のカラワン回想録を中心にしたタイ・シリーズのいちおうのまとめにしたい。

韓国抵抗歌集

地下出版復刻版（原語版）

東学農民戦争より百年の抵抗史を、民謡・歌曲・歌謡曲・学生労働者の歌でつづる。

定価一三〇〇円　送料二五〇円

カセット

ポーランド禁じられた歌

ポーランド国歌・しだれ柳・今日は会えない・秋の雨・モンテカシノの赤い芥子・埋められた武器の子守歌・明日はワルシャワ・祖国との別れ（オギンスキ）・ポーランド式料理のつくりかた・娘にあたえる歌・ヤネクヴィシニエフスキは死んだ・革命（ショパン）・ストラト（百年）　**出演＝水牛楽団・水木陽子・林光・高橋アキ・津野海太郎　定価二〇〇〇円　送料二四〇円**

申込みは水牛編集委員会

郵便振替口座　東京四―九一七九二まで

購読の御案内

＊本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

＊申し込みと送金は郵便振替（口座名水牛編集委員会、口座番号東京四―九一七九二）または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということを明記してください。

＊購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信　第四巻第六号

一九八二年六月十日発行

定価　二〇〇円

発行人　堀田正彦

発行所　水牛編集委員会

〒154 東京都世田谷区新町2―15―3　八巻方

電話〇三（四二五）九六五八

振替口座東京四―九一七九二

印刷所　㈱トライプリントショップ